

1 緑のカーテンの利用

（1）緑のカーテンとは

- ・緑のカーテン→特に真夏において、植物を建物の外側に生育させることで、建物の温度の上昇を抑えたり、日差しの射し込みを和らげたりすることで、省エネにつなげる手法である。
- ・緑のカーテンに使う植物は、カーテン状に広がるつる性植物である。

（2）ネット

- ・ネットは網目のもので、18cmの角目またはひし形のものを用いるとよい。
- ・ネットの上下に支柱を入れ、左右・上下をピンと張り固定する。→左右はロープなどを通しておく。
- ・ネットは、建物に向かって約70度の角度になるように斜めに張る。

（3）品種

- ・病気に強く、つるがよく伸びて丈夫な品種を選ぶ。
- ・つる性植物を苗で購入するときは、葉の色が濃く、節間がつまって茎が太く、頑丈なものを選ぶ方がよい。

（4）栽培のこつ

- ・コンテナ栽培が適する。→できるだけ大きなコンテナを選ぶ。
- ・栽培用の土は、培養土（肥料入り）を用いる。
- ・培養土はコンテナの縁から2cm程まで少し多めに入れる。→深いコンテナを利用するときは、鉢底石を薄く敷く。
- ・培養土約30lに1株を目安にする。
- ・コンテナに直接種を播いてもよいが、別のところである程度生育させてから植えつける方がよい。
- ・苗の植え付けは、土のついたまま苗の入る大きさの穴をあけて入れ、隙間に土を入れて茎の根元にも土をかぶせる。
- ・植え付け後、十分に水をやる。
- ・コンテナの置き場所は、ネットの内側にする。→ネットが絡みやすく、葉がネットの上に繁り、果実は下に垂れて風による実の傷みを軽減できる。
- ・コンテナは、じかに地面に置かず、ブロックなどを敷いてから置くほうがよい。→底の通気や虫の侵入を防ぐ。

（5）一般的な管理

- ・ウリ科を利用する場合は、本葉が6枚ほどになったら摘心して子蔓（つる）を伸ばすようにする。

- ・追肥は、植え付け後2週間目から7～10日に1回、株から少し離れた位置に1株あたり軽く一つまみ（8～10g：化成肥料）を与える。
- ・緑のカーテンの場合は、まず葉を多く繁らせたいので、初期に咲く花は摘み取る。
→追肥は多めに与える。
- ・葉が十分繁ったなら、追肥の量を控えて着果をさせる。
- ・夏場では、蒸散量が多くなるので、晴れた日には朝夕にコンテナからあふれ出るくらい十分に水を与える。
- ・土の表面にまで根が張って土が沈んできたら、コンテナに土を足して乾燥を防ぐ。
→緑のカーテンが長持ちする。

2 緑のカーテンに向く植物

(1) ヘチマ（ウリ科）

①特徴

- ・ヘチマは生育が旺盛で、5m以上の高さになる。
- ・茎が太く、葉が大きく折り重なりあうので日光を確実にさえぎってくれる。
- ・たくさん植えすぎるとうっとうしく感じることもある。
- ・60cmのプランターに2本程度を植えると、幅1mくらいの緑のカーテンに仕立てられる。
- ・ウリ科の1年生つる性植物で、東南アジア原産の雌雄異花の植物である。
- ・高温性で生育適温は25～30℃である。

②栽培

- ・一般には遅霜のなくなった5月上旬に播種する。→10cm間隔で播いていき覆土は1～2cmとする。
- ・葉が4～5枚になったら間引いて株間40～50cmにする（60cmプランターなら1～2本）。
- ・苗を植え付ける場合は、5月中～6月上旬に苗の根をほぐしてから株間40～50cmで植え付ける。
- ・かん水は毎日1回行い、気温が25℃を超えるような晴天日には朝夕の2回に増やす。
- ・親蔓（つる）が50cm位になったら摘芯し、子蔓を伸ばすようにする。
- ・子蔓が50cm位になったら摘芯し、孫蔓を伸ばし、孫蔓が50cm程になったら摘芯するというふうに、3～4回摘心して蔓が横方向に広がるようにする。
- ・雌雄異花なので、訪花昆虫が少ない場合には人工授粉を行う。→他家受粉の植物なので、異なる株の雄花で受粉させる。
- ・幼果を利用するときは、開花後10日くらいで収穫する。
- ・完熟（果実は黄色くなる）果は、10～11月に収穫する。

③利用

- ・幼果は皮むきし、輪切りにして塩ゆでした後、酢味噌和えとしたり、味噌と油いた

めにして食べる。

- ・完熟果はたわしをつくることができる。→その際の種は翌年の栽培に用いる。
- ・茎を1 m位で切ってヘチマ水を得ることができる。→化粧水や咳止めに利用できる。

(2) ニガウリ (ゴーヤ：ウリ科)

①特徴

- ・葉は切れ込みが深く、明るいグリーン色をしているので、日光を軟らかくさえぎってくれる。
- ・ヘチマに比べ、部屋は明るくなり、窓辺を涼しげに演出してくれる。
- ・ウリ科のつる性植物で、原産地は熱帯アジアである。
- ・生育適温は25～30℃で高温多湿を好むが、乾燥には弱い。

②栽培

- ・5～6月に播種する(5～10 cm間隔)。→苗で植え付ける場合も同時期である。
- ・連作障害が出やすいので、プランターの土(培養土)は新しい物を使う。
- ・酸性土壌に弱いので、石灰(消石灰、有機石灰、苦土石灰)を培養土に少し混ぜる。
- ・硬実種子なので、ぬるま湯に一晩浸けてから播種するとよい。
- ・株間は25～30 cmとし、直まきで混み合っているときは、本葉3～4枚になったら間引く。
- ・果実は子蔓に多くつくので、親蔓は1 m位で摘心する。
- ・子蔓が伸びてきたら、3本扇形に広がるように誘引する。
- ・雌雄異花であるので、訪花昆虫が少ない場合には人工授粉を行う。
- ・開花後2～3週間で収穫できる。→収穫せず果実がオレンジ色になるまで枝につけておくと、翌年用の種が採れる。

③用途

- ・果実は油いため、てんぷら、酢みそ和えなどに利用する。
- ・苦味成分は、健胃や鎮静作用があり、夏に消費が盛んになる。

(3) アサガオ (ヒルガオ科)

①特徴

- ・アサガオは、つるが長く伸びるので日よけを目的とした緑のカーテンに利用できる。
- ・食べる楽しみだけでなく、花を楽しみたいという場合にもってこいである。
- ・特に「西洋アサガオ」は花が夕方までしぼまず、つるは7 mにまで伸び、開花期間も初秋までと長い。
- ・花は、日がさしてくる方向に向いて咲くので、遠くからの見栄えがよい。

②栽培

- ・直播や苗を植え付けることによって栽培する。
- ・硬実種子なので、一晩ぬるま湯に浸けてから播種する(発芽適温は20～25℃なので早播きは禁物である)。→5月中～下が播種適期で、覆土は1～2 cmがよい。

- ・培養土には苦土石灰を混ぜ込んでおく。
- ・植え付け間隔は 60～90cm である。→60cm プランターなら 1 鉢 1 本とする。
- ・栽培期間中、つるが長くのびていき、下葉が枯れ落ちることが多いので、初期の内に摘心し、株の下方の枝数を増やしておく。→腋芽はすべて残し、誘引する。
- ・「西洋アサガオ」や「曜白（ようじろ）アサガオ」以外は、早朝開花して午前中にしぼんでしまうので、咲き終わった花は摘みとる。→摘み取らないと種がつき、株が早くに老化してしまう。
- ・カーテンの内側には黄色くなった葉が目立つので、こまめに取り除く。

（4）その他の植物

- ・ウリ科→キュウリ、ひょうたん、へびウリ、カボチャ等
- ・マメ科→インゲン、シカクマメ、ツルマメ等
- ・ヒルガオ科→テラスライム、ユウガオ、ルコウソウ等
- ・ツルムラサキ科→ツルムラサキ
- ・ムクロジ科→フウセンカズラ